

アモキシシリン（AMPC）投与後 の発疹に関する前方視的調査

- 平成23年8月27日
- 第21回日本外来小児科学会年次集会
- 幸道直樹
こどう小児科・
近畿外来小児科学研究グループ

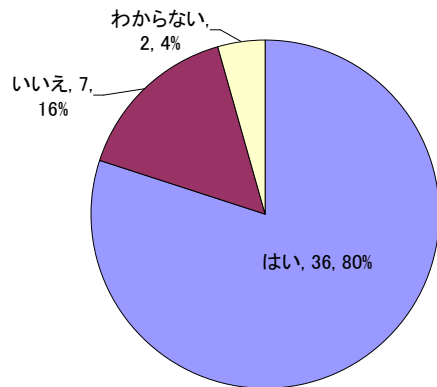
▶【はじめに】

- ▶ アモキシシリン(AMPC)は小児科領域では頻用される抗生剤の一つであるが、投与後の発疹出現の点から使いにくいという声も聞かれる。
 - ▶ 第13回近畿外来小児科学研究会(2007/11/4)参加医師に対してAMPCに関連する発疹について行ったアンケート調査では、発疹は80%の人が経験し、その頻度は1-5%と答えた人が35%、1%以下が31%であったが、10%以上との回答も17%あった。
-

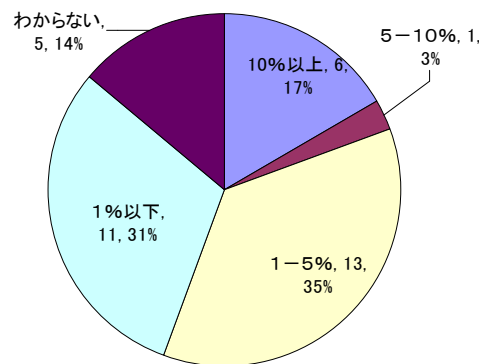


AMPC関連薬疹についてのアンケート調査

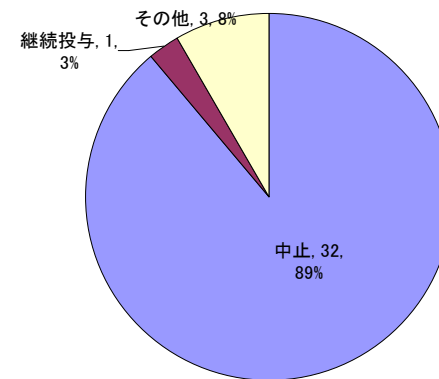
第13回近畿外来小児科学研究会（2007/11/4）



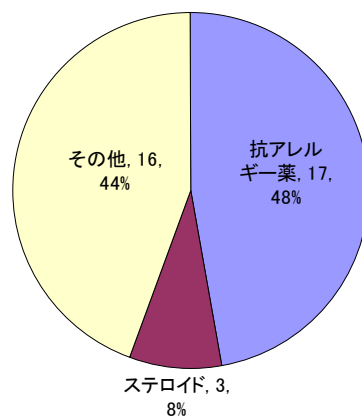
AMPCに関連する薬疹を経験したことはありますか



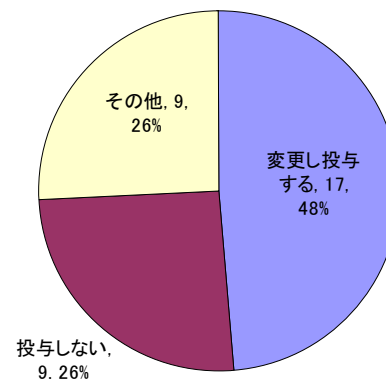
AMPCに関連する薬疹の頻度はどれくらいだと思いますか



薬疹が出現したらどのように対応しますか



対処薬を投与しますか



抗菌薬を変更しますか

▶【目的】

- ▶ 抗生剤 (特にAMPC)投与後の発疹の頻度や性状を調査する。

▶【対象と方法】

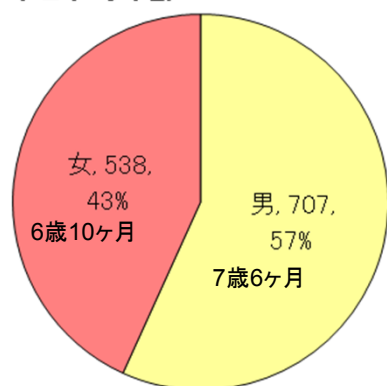
- ▶ 近畿外来小児科学研究グループの医療機関において2009年1月より2010年12月までの2年間にわたって、迅速検査で確定した15歳未満の溶連菌感染性咽頭炎を登録し、AMPCまたは他の抗生剤を投与後に観察された発疹について前方視的に検討した。



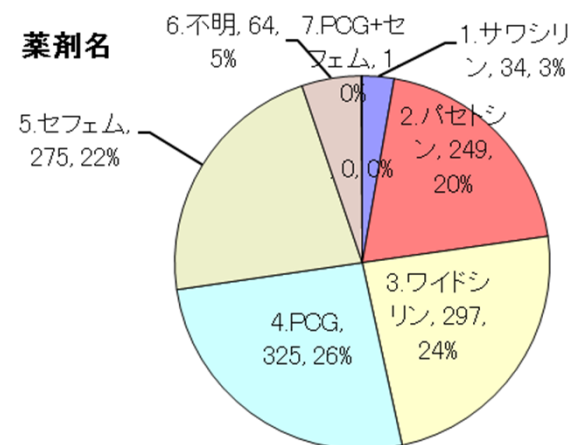
登録症例のプロフィール

▶ 有効登録症例1245例（男児707例、女児538例）

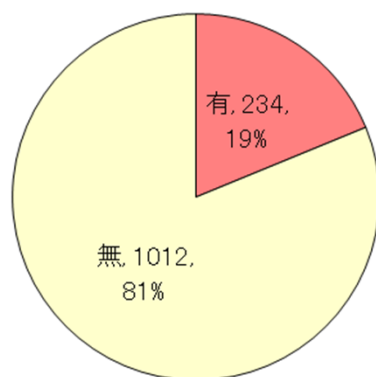
男女分布と平均年齢



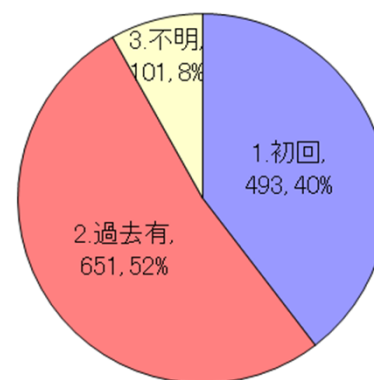
薬剤名



初診時発疹の有無



初回投与か否か？



結果 1

- ▶ 有効登録症例1245例（男児707例、女児538例）
- ▶ AMPC投与群 580例 （男児333例、女児247例）
発疹出現数 18例（3.1%）
男子12例 女子6例
- ▶ 他の抗生剤投与群 665例 （男児375例、女児290例）
発疹出現数 14例（2.1%）
男子9例 女子5例



結果 2

▶ AMPC投与群の内訳は

サワシリン 34例

発疹1例(2.9%)

パセトシン 249例

発疹7例(2.8%)

ワイドシリン 297例

発疹10例(3.4%)

合計 580例

発疹18例(3.1%)

P<0.037

▶ その他の抗生剤の内訳は

PCG 325例

発疹3例(0.9%)

セフェム系 270例

発疹9例(3.3%)

2剤併用例 1例

発疹なし(0%)

不明 63例

発疹2例(3.2%)

その他 6例

発疹なし(0%)

P<0.04

▶ 合計 665例

発疹14例(2.1%)

結果 3

- ▶ 発疹の出現時期は 抗生剤投与中 76%
投与終了後 24%
- ▶ 発疹の性状は
AMPC群: 多型紅斑型、湿疹型、固定薬疹様など多彩であった。1例は入院にて経過観察された。

他の抗生剤群: じんましん、汗疹様、湿疹型など軽症例が多かった

症例 1-1 6才男児 (発疹出現 1 日目)



ワイドシリン服用中に顔、体幹、四肢に多形紅斑が出現。発熱なし。薬疹かウイルス性か判断がつかず、発疹がひどいためワイドシリンを中止した。



症例 1-2 (発疹出現4日目)



色素沈着を認めて軽快した。その後、他医(皮膚科)での検査でEBV IgM陽性、GOT55、GPT87と判明した。

EBV感染の併発があり、AMPCを投与したため、発疹が出た可能性があると考えた。そういう意味で薬疹とってよいかもしれない



症例2 5才男児

ワイドシリンを服用し解熱した後、4～5日して再び発熱し、翌日から（ワイドシリン投与8日目）発疹が出現した。

発疹は、写真は2日目のもので、その後拡大したとのこと。頬部、体幹、上肢に紅斑が集簇。咽頭に粘膜疹あり。エンテロウイルス感染症と診断した。その後ゆっくり解熱したが、発疹が増強したため、家族が心配して急病センターを受診。

S-J症候群を疑われ、救急入院した。全身状態はよかったようだが1週間余り入院。病院での検査ではEBV感染は否定、HSV IgM±。主治医の診断は「多形紅斑。ウイルス感染が原因と思われる。薬疹は否定的」とのこと。



結論

- ▶ 本研究では特にAMPC投与後の発疹出現について調査したが、むしろ対照群の1つであるPCG群の発疹出現率が有意に低く、AMPC群はセフェム系群と同頻度であった。
- ▶ 発疹にて入院した1例は、ワイドシリン投与例で多型紅斑だったが、ウイルス感染併発が原因と思われた。別の重症発疹症例も、後にEBV感染併発が証明された。
- ▶ 発疹の性状はPCG群、セフェム系群では汗疹様、湿疹様など軽症であったが、AMPC群では多型紅斑など多彩な傾向であった
- ▶ AMPC群の発疹性状が他の群に比して多彩であることが、小児科医にとって発疹出現頻度が高い印象を与えている可能性が考えられた。



近畿外来小児科学研究グループで今回の調査研究に参加された医療機関(順不同・敬称略)

絹巻小児科クリニック

絹巻 宏

岡藤小児科

岡藤 輝夫

福田診療所

福田 弥一郎

日比小児科クリニック

日比 成美

橋本こどもクリニック

橋本 裕美

松浦医院

松浦 伸郎

日野医院

日野 利治

川崎こどもクリニック

川崎 康寛

土庫病院

西原 信

こうどう小児科

幸道 直樹

